

筆順について

一 筆順とは

1 筆順は書き順ともいう。むしろ書き順というほうが、これからの日本語としては望ましい。以下、この文には混用する。

書き順は、字を書く上での一定の順序である。

それは、古人の長い間の研究の蓄積であるから、それにしたがって書けば能率のかつ効果的である。

2 世には筆順はいらないという説をなすものがある。たとえば「因」は「口大」の順でも「大口」の順でも、ともかく、できあがり「因」になっていさえすればよいというのであるが、さて実さいに書いてみると、やはり結局は伝統的な原則による「口大」の順に帰するようである。

3 書き順は、原則として各字について一定しているが、なかには二様（まれに三様）の書き順をもっているものがある（たとえば「馬」または「死」など）。そのさい、ちがった書き順は互いに「ちがって」いるのであって、どちらも「まちがって」いるのではないということを、われわれはよほどよく心えておかなければならない。

4 書き順の学習には、まずカタカナの書き順を検討してみるのがよい。カタカナの書き順の原理を正しく身につけていけば、その他のことはさしてむずかしいことではない。カタカナは漢字の一部分であり、そこには書き順の大原則たる、

- (1) 上から下へ 【例】 ニ ミ ソ シ
 (2) 左から右へ 【例】 ハ リ ソ ツ
 (3) ヨコからタテへ 【例】 ナ サ ヤ キ
- などが、すでに実践されているのである。
- 5 筆順は、かい書体と行書体とで共通の一体をなし、草書体は別に

体をなす。すなわち、草書体の筆順は、全く別の系統に属するものである（たとえば「本」の「木」と「牛」となど）。

それゆえ、かい書体の筆順は、原則として行書体の筆順と一致させるたてまえである。つまり、かい書の筆順を考えるにあたっては、必要に応じて行書体の筆順を参考とするのである。

6 おなじかい書体の中でも、いわゆる真のかい書体があり、また行書体に近い——というよりもむしろ行書体への筆意をはらんでいる——かい書体もある。大体において、教科書体は前者に属し、書家の書くものは後者に属すが、そのさい、しぜん筆順が動くもので、たとえば

無 ㄣ (書きとりの) ㄣ (書道的)
 馬 𠃉 (書きとりの) 𠃉 (書道的)

のようなものがある。

二 筆順の原則

1 単体とヘンとは、書き順を異にすることがある。

(単体の筆順) (ヘンとしての筆順)

牛 ㄣ (牛ヘン)

耳 𠃉 (耳ヘン)

文部省の「筆順指導の手びき」には、右の耳ヘンをも単体と同じ筆順で書くことにしているが、それには必ずしも賛成しえない。

(単体の筆順) (カンラとしての筆順)

羊 ㄣ (羊ヘン)

善 ㄣ (善ヘン)

それで「善」と「美」とでは、その「羊」の書き順がちがうのである。もっとも、書道的な「善」の字の形では「マ三ソ口」の筆順となる。

ちなみに、カシラもカシムリも、またアシ・ニウなども、すべて広義のヘンの一種である。というわけは、ヘンとは扁平の扁であって、すべて単体の広い形を、漢字構成の全体的なつりあい、平たい形にしたものという意味だと解されるからである。

2 ある字には、まれに二つ以上の正しい筆順がある。その最もいちじるしい例は「必」の字である。

(1) ノ、し、

(2) ノ、し、

元来、この「必」の字は「戈」と「八」との合字であるのに、明朝活字の書体では、あたかも「心」にタスキ(ノ)をかけたような形になっているので、一般の人は、しぜん「心ノ」の筆順で書くことが多い。それから新たに「心ツ、」という筆順も生じたわけであるが、もし、あらためて筆順を教えるとすれば、やはり(1)の筆順がいちばんよい。

3 字形の構成のちがひによって筆順がちがってくる例。

(1) 惑 (感心) 惑 (罵斥)

(2) 盛 (成皿) 盛 (皿)

字形も筆順も、入門的には(1)のほうがよいが、実用的には(2)のほうが早く書けてよい。書道的でもある。

4 字原によって字形に小差があり、それによって筆順を異にするものがある。

(字原)

ㄨ (右手の象形) ナ (ノ)

ㄨ (左手の象形) ナ (ノ)

(字形) (筆順)

右 有 布

この「右」と「左」とを書き分けることは、こどもにとっては少しむずかしいが、文部省の「筆順指導の手びき」にも採用している。

「右」の字原に属して、実さいには「左」の筆順に所屬がえをしているもの(友——ただし草書では字原どおりの筆順で書く)、および字原はちがうが、結果的に「右」の筆順に所屬しているものを左にあげる。

右の筆順の系統に 希

左の筆順の系統に 友 存 在

5 シンニウ(シンニウ)とエンニウ(エンニウ・インニウ)またはケンニウ(ウ)とカギニウ(ウ)とは、あとから書く。

近 (斤)

建 (聿)

直 (百)

起 (起)

題 (見頁)

如 (儿)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

おなじニウでも「走ニウ」「是ニウ」「如ニウ」などは、さきに書く。

果 (目)

起 (起)

題 (見頁)

如 (儿)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

火 (火)

これに対して「小」「水」などは中から左右(下)への順である。

小 (ノ)

当 (ノ)

水 (ノ)

赤 (土)

右肩のテンは最後に書く。

犬 (大)

博 (博)

伐 (代)

下にぬけるボウは最後に書く。これは最も重要な一原則である。

中 (口)

申 (日)

半 (亘)

車 (亘)

事 (事)

9 下でとまるボウはさきに書く。これは前項に対照して重要な筆順の一原則である。

下 (下)

下 (下)

